

Book Review

総義歯づくり すいすいマスター 総義歯患者の「何ともない」を求めて ～時代は患者満足度～

堤 嵩詞・平岡秀樹 著

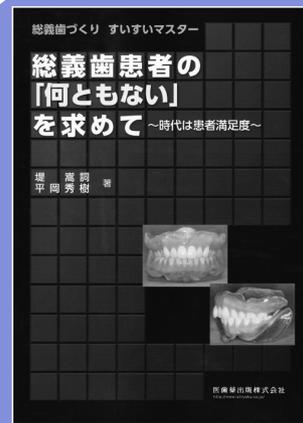


Reviewer

井出吉信 Yoshinobu Ide

(東京歯科大学解剖学教授、同大学学長)

A4判、200頁
定価(本体8,600円+税)
医歯薬出版 刊



機能があるから形になる。Form follows function——形態は、機能により作り出され、機能により限定される。

生物の臓器は、機能によって、それを無理なく行える形になっていく。補綴装置も同様である。機能に合っていて、無理なく機能が行える形でなければならぬ。機能に協調した形であれば、生体はストレスや違和感なくそれを受け入れる。これが、標記書籍のタイトルにもなっていて、著者らが追求する「何ともない」総義歯であろう。装着して「痛くない・外れない」のではなく「何ともない」、噛んで飲んで話して「何ともない」——GraphとPart2で紹介される症例の患者がたびたび述べている「何ともないんよ」という一言には、補綴治療が目指すべき単純かつ究極の目標が、端的に集約されている。

堤 嵩詞氏(兵庫県・PTDLABO)と平岡秀樹氏(広島県・平岡歯科医院)により上梓された本書においては、一冊を通して、この「何ともない」義歯を提供して高い患者満足度を得るための、総義歯治療・技工の考え方と実際が、臨床例の詳細な記録も交えて示されている。

まず巻頭のGraphでは、「何ともし

い」総義歯を装着した患者のいきいきとした笑顔が示され、本書の象徴となっている。次のPart1では、患者を“顧客”ととらえ、顧客のニーズを適切かつ十分に引き出したうえで、よりよい製品・サービスを提供し、さらに評価・改善を重ねることで常に高い顧客満足度を獲得・維持するという品質管理の考え方の総義歯治療への応用が提言され、患者満足度獲得のスタートラインが診査・診断にあることを強調している。

診査・診断による患者のニーズ(主訴・問題点)の把握後、総義歯治療の要となる工程は印象採得と咬合採得であり、ここで生体のあるがままの状態がとらえられ、成型精度の高い技工操作が行われることで、生体にストレスなく受容される総義歯作りが可能となる。これらチェアサイド・ラボサイドにおける適正な操作のバックボーンとなるのは、解剖学・生理学・物理学・材料学などに基づくさまざまな理論や基準の理解と活用であることから、それらについても随所でわかりやすく図解することで、Part2とPart3が展開されていく。

すなわち、Part2では、Graphで掲

げられた患者の治療の初診から術後までの実際が、時系列で詳細に、患者の率直な感想もあげながら解説される。若手歯科医師のキャラクター Dr. A子は、読者諸氏にとって等身大の存在でもあり、彼女から発せられる臨床上の疑問や気づきのセリフには共感できるだろう。続くPart3では、チェアサイドから提供された患者の情報をそのまま写した生理的な総義歯が完成するまでの技工操作の理論的背景と手技が詳述されている。

さらに巻末では、Supplementとして、総義歯学の開祖 Alfred Gysi の治療のライブデモ映像の抜粋『映像に残された A. Gysi の総義歯製作』と、堤氏による総義歯治療・技工に関する考察や知見をさまざままとめた『いればのたはこと』が合わせて20頁にわたり添えられ、大変読み応えがある。

基本に基づく臨床のノウハウがぎゅぎゅ詰まっております、いづどこから読んでも、その都度実践につながるヒントを得られるだろう。共通言語のもとに歯科医師と歯科技工士が協調して患者に「何ともない」総義歯を提供していくために、両者にとっての必読の書と考える。